

## 【その他の朝鮮行】

前回は須永の朝鮮行について須永文庫にある『須永日記』や『輟齋詩稿続編』、韓国側資料である金允植の日記『続陰晴史』などの記述をもとに考証しました。

それによると大正2年（1913）、大正8年（1919）、昭和13年（1938）の旅行の事実が裏付けられました。大正4年（1915）も確実とみられ、同3年（1914）、同5年（1916）は可能性が高いものの決め手に書けていません。初渡航の明治28年（1895）は資料が豊富にありますが、別の機会に詳述したいと思います。

今回は、それら以外の旅行について須永文庫にある朝鮮知識人の書画から考証を進めます。

まず、大正13年（1924）の渡航が呉世昌と池雲英、池錫永兄弟の文章から分かります。

## 【呉世昌】

呉世昌（1864～1953）は開化派官僚、書芸家、ジャーナリストなど多彩な顔を持ち、日本に亡命していたこともありました。須永邸で須永文庫の整理に携わったこともあります。亡くなった時は、各界の代表らによる「社会葬」で送られました。それから70年となる昨年はソウルの国立中央博物館で呉世昌の展覧会が開かれました。

須永文庫には篆書で書かれた呉世昌の七言絶句の書軸があります。

萬壑ㄣ霜剩一枝

縱然醫俗已嫌遲

任它梅菊隨時艷

合向江湖伴釣絲

起句三字目「ㄣ」は「氷」のことです。転句の二字目は「也」の篆書体とよく似ていますが、それでは平仄が合わず、「它」と思われます。ただ「他」と通用し、「任他」同様、「さもあらばあれ」という意味だと判断しました。

読み下してみましよう。

萬壑（ばんがく）の氷霜、一枝を剩（あま）す。

たとひ俗を医すともすでに遅きを嫌ふ。

さもあらばあれ梅菊は時に従ひてなまめかし。

こぞって江湖に向かひて釣絲を伴にせん。

一方、落款は隸書で書かれ、こうあります。

日東狂客忘形旧交也。来漢上、索拙筆。故録俚句奉。就雙正焉。詩乃頃歲滯獄、  
值嚴寒。玻璃窓氷結、如錢厚。戲噓指頭、写竹於氷上、而題之者。偶爾溯想、可  
癸一噓。 甲子中夏下澣、閒道人吳世昌

「日東狂客」とは須永のことです。「忘形交」は『全訳 漢辞海 第四版』（三省堂）に「形式的な礼儀・作法を問題にしないで、心と心で親しく交わること」とあります。「漢上」はソウルを指す漢城のあたりか、漢江のほとりという意味でしょうか。須永がソウルにいる吳世昌を訪ね、書を求めたことが分かります。さらに、この詩は嚴寒の牢獄で氷結したガラス窓に指で竹の絵を描き、七絶を書きつけたとあります。

吳世昌は大正8年の三・一独立運動の際に運動の中心にいて罪に問われ、服役しましたが、落款はこの時のことを言っているようです。

「甲子」は大正13年です。中夏下澣は五月下旬ですが、旧暦でしょう。「閒道人」は吳世昌の別号です。

## 【吳世昌の号】

呉世昌は韓国の篆刻史にも名を残しているので、この書軸に捺された篆書の落款印も紹介します。

まず、いずれも方形印で、白文の姓名印と朱文の別号印「葦滄」が捺されています。つまり隸書と篆書で二つの別号「閒道人」「葦滄」が出てきます。呉世昌は百余個の号を使っていたそうで、韓国の研究者イ・スンヨンさんが「葦滄の号に表れた精神世界」という論文(ハングル、注1)で呉世昌の号を分析しています。それによると、呉世昌の号は「考証学的性向」「仏教的性向」「自然と道家的性向」の三種類に分類できるそうです。

「葦滄」は呉世昌の号の中で代表的なもので、達磨大師の故事に由来し、この論文では「仏教的性向」に分類されています。

「閒道人」も「仏教的性向」に分類され、これは仏典『証道歌』の「絶学無為閒道人」という文言に由来するということです。

### **【百劫餘生】**

書軸には遊印らしきものも捺されています。円形印の朱文で、「百劫餘生」と読めます。「百劫」は数えきれないほど長い時間を言います。「仏教的性向」になるのでしょうか。

イ・スンヨンさんはまた、「葦滄 呉世昌の実学的芸術観研究」(原文はハングル、

注2) という論文で呉世昌の印を一覧表にして先ほどの三種類とは別に「姓名印」、「別号印」など14種類に分けています。この中で「百劫餘生」を「吉祥印」に分類しています。



**百劫餘生印**

池雲英、池錫永兄弟については次回以降取り上げます。

注1

이승연 「위창葦滄의 호예號 나타난 정신세계」 『동양예술』 (8), 2004

注2

李昇妍 「葦滄 吳世昌의實學的 藝術觀 研究」 圓光大學校大學院, 2003, 博士論文

2024年6月14日 広沢有久

須永文庫資料研究室のアドレスは <https://sano-haku.com/sunaga-bunko/>